
絶滅危惧種『大和撫子』

zens

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

絶滅危惧種『大和撫子』

【Nコード】

N1595S

【作者名】

zens

【あらすじ】

未確認動物（UMA）の探求にばかり勤しむ少しだけ変わった少年、久宝寺 優真は校内ではやや浮いた存在である。

そんな彼の助手の少女、大和 撫子はいつも振り回されてばかりいるが彼のことが心配で仕方ない。果たして二人は大和撫子を見つめることが出来るのだろうか。少女の心配の種は減るのか。

1話：彼女は偽物

クニマスという絶滅したとされる魚の発見。

世間でも大きな話題となり、発見者は一躍時の人となった。

それから数カ月。

未だにこの話題で盛り上がる部活があった。

「これならば、ニホンオオカミ、ツチノコ、ネッシーがいてもおかしくないはずであろう」

そう、俺の学校の生物部である。

部員十名とそこそこの規模だが、ろくな人間はいない文字通りの掃き溜め。かくいう俺も同類だ。

「まあ、これを語るにはまず事実が必要だ。久宝寺君、次回のUM A探索はどうなっているのかね？」

その筆頭である部長が俺にチョークを向ける。

「はい、部長。前回のツチノコ探索は支出二十二万円という設立以来最悪の支出です。ですので、今は金がありません。そこで、日常でも探せる、大和撫子探しに決定しました」

「大和撫子、だと？ スケールが小さいではないか。私はだね――」

「あんたが金使ったんだよ、馬鹿部長」

「はい、申し訳ありません」

謝らなくていいから使った分は返してくれないだろうか。

しばらくまた、強制的に働いてもらうでしょう。

「謝ったらいって問題じゃないですって……。とりあえず、また連絡とっておきましたから働いてください」

「嫌だ。もう働きたくない」

何かトラウマでも植えつけられたのだろうか。

俺の紹介先は普通のコンビニなんだけどなあ……。

部長がガタガタと震えて話が出来なくなってしまったので、俺は溜息をつきながら、会計報告書に部長印を捺した。

さて、生徒会に提出してこないといけないな。

そう思っただけで生物室を出ようとする、出口のすぐそばの扉から一人の女の子が顔を出した。

「呼びました？」

「いや、呼んでないよ」

「そう、ですか……」

唯一の女子部員である、大和 撫子さんはしょんぼりしてまな板の上の蛙の剥製の前に戻った。

彼女は、『だいわ なでしこ』という名でまだ一年生である。

間違っても『やまと なでしこ』ではない。

しかし、俺は思う。部員の皆は慣れ過ぎているが、彼女は振る舞いは大和撫子なんじゃないかって。

もし、本物の大和撫子だったら世紀の大発見としてもてはやされるだろうか。

いや、それはないか。

今の時代に大和撫子という誰かが押しつけた幻想が生きる場所はないだろう。

しかし、だからこそ、見つける価値があると俺は考えている。

まだ夢を追える歳だ。いなかったらいないと夢の終わりで結論付けられない。

「部長。大和撫子は既に絶滅寸前。一度くらいお目にかかった方が生物学者を志す先輩には得。実際に見た、と、机上の空論とでは雲泥の差がある」

「実に久宝寺先輩の言うとおりです。大和撫子は放っておけばいず

れ絶滅しますよ。ならば、絶滅後に後世に語る継ぐのが我々の役目ですよ」

「いやいや、あんた。保護しないとダメですって。剥製にしましょ……ここにいと、どうしても夢見がちになつてしまふ。けれども、そんなここが好きだ。

周りの随分と賛同してくれる声を尻目に俺は生徒会室に向かった。

再び、生物室へと戻つてくると、資材置き場から今度は生きた蛙の入った蓋がされた小さな水槽を持つてくるダイワさんの姿があった。

こちらは生物部の飼ひ蛙であり、剥製や解剖される心配はない。そういえば、彼女にはまだ意見を聞いていなかったつけ。

「ダイワさん。ダイワさんはどうしたい？」

すると、蛙をバラバラにしているナイフを持ちながら彼女がこちらに向いた。

「そうですね。ここは皆さんで多数決をとつてはいかがでしょう？」
笑顔がちよつと怖い。

ただ、彼女は蛙の研究という生物部として正しい活動を行っている。

もちろん、他のこともするのだが、活動日には必ず蛙の解剖図をじつと眺めている。たまに笑う。

だから、何か得体のしれない怖さがあつて誰も逆らう者はいない。だつて逆らつたら解剖されそうなもの。

現に全員が一系乱れぬ頷きで彼女の提案に支持を表明していた。

皆が彼女には一目置いてるからだろう。

多数決の提案はあっさりと通り、その場で採決が行われた。

その結果、今度のU M A探しは全会一致で大和撫子に決定した。

「久宝寺先輩、よろしく願ひします」

それはいいが、ついでに紅一点を押しつけられてしまったのは納得がいかない。

俺の助手を自称する彼女だが、普段の頼りなさから想像できないほどに調査の時には頑ななのだ。

可愛いし、気が弱いから最初の頃はただの大人しいだけの普通の女の子だと思ったのだけど猫を被っていたらしい。

そして、俺以外の誰にも見せないあたり狡猾さも感じる。

「あまり無茶はしないでくださいね。いつも心配なんですから」

「今回は街の調査だから問題ないさ」

いい子なんだけど、それだけがネックだ。

何と言つか母親に通ずるものがある。

「久宝寺先輩の努力は素晴らしいです。……けれど、先輩は無茶すぎなんです。先日だって三途の川を見たいからって道路に飛び出したりして……。そういうのはやめてください」

「反省してます」

油断をすればすぐお説教である。

もちろん反省の態度を示せば、それも長くは続かない。

「分かりました。久宝寺先輩を信用します」

……信用ねえ。

「……ダイワさん。折角組んだのだし、一緒に頑張ろう」

「は、はい。先輩の足を引っ張らないように鋭意努力します」

もしかして、彼女がうるさいのは俺に対する信用がないからではないだろうか。

その信用がそう簡単に得られるなら、彼女は今頃お淑やかだったろう。

2話：彼女は猫被り

大和撫子。

辞書で調べると、日本女性に対する美称とあった。

ならば、全ての女性が大和撫子なのではないか。

そう考えた俺は、翌日、仲良くしてもらっている知り合いを生物室に招いていた。

「久宝寺君。これのどこが大和撫子なのかね？」

しかし、部長はその女性を見て呆れて物も言えない様子だった。

……いや、違うか。金魚が酸素が足りなくて水面に出てきた時の顔だ。

一方、俺が連れてきた女性もまた冷めた目で部長の顔を見て、嫌そうに溜息をついた。

「何ですか、この人は。失礼極まりありませんね。頭は退廃的、衣服は古典的、教養は絶望的、容姿は壊滅的。いいとこなしです」

「……大和撫子が、こんなことを言うわけがない。早く元いた場所に返してきたまえ」

元いた場所は今日から部長が行く場所なんです。

本人も分かっているから、それは口をつぐんでせめて最後の夢としたい。

「あー、そうだ、部長さん。……ばつくれたら、うちの棚に貴方が並ぶことになります。用件はそれだけです」

今度こそ女性生物室を後にした。

もちろん、夢は覚める。現実とは常に酷なものである。

二人では広すぎる部屋に残ったのは大和撫子が見つからずばかりする俺と、現実を突き付けられた部長だけだった。

放課後。

早速、俺は街へと繰り出した。

実地調査は普段生物室にしかない俺にとっては羽を伸ばす絶好の機会である。

「ダイワさん。大和撫子ってどこにるんだろうね？」

「私には到底見当もつきません」

「絶滅してるかもなあ。ツチノコ探しよりはまだ希望はあると思うんだけどね」

今日はダイワさんがいるから羽は伸ばせないのだけど。

「いつそダイワさんを大和撫子に仕立て上げようか」

「でっち上げはいけませんよ。学者は真実のみで勝負するべきです」

「でも、ダイワさんは大和撫子になれると思うんだ。うるさくなかったらぴったりだ」

「……」

……今のは誰かが数式で証明してくれないだろうか。

期待した反応と違ったものだからこちらとしても戸惑いが隠せない。

「学者を目指すから真実で勝負したつもりだったのだけどね」

「………何だか恥ずかしいです」

……あれ？

いつもなら背中を思い切り叩くはずが、今日の彼女はただ恥ずかしがって俯くだけだった。

この新鮮さは一体何だ？ 彼女に感じた感情は畏怖の念と友情、

そしてほんの少しの興味。

そのどれにも当てはまらない、この感情は何なんだ？

これもまた研究するべきなのかもしれない。

「大和撫子はこんな感じですか？」

色々と考え込んでいた俺をダイワさんが下から覗き込んでいた。

その顔は恥ずかしさなど一片もなく、悪戯が成功して嬉しいといった子供の顔だった。

……一本取られた。

頭をかく俺から素早く離れた彼女は後ろ歩きをしながら笑っている。

「待てっ。先輩としての威厳のためにも一度ダイワさんと話し合う必要があるそうだ」

「いやです。ふふっ」

背中を向けて一目散に逃げるダイワさんを俺は追いかける。

俺が見るべきは彼女ではなく、周りの人間だったということに気がついたのはしばらく経ってからのことだった。

日も沈むと学生というものは家に帰らないといけない。

もちろん守る義務などはないが、俺もまた親の庇護のもとにいたがために余計な心配をかけるつもりもない。

駅前はまだ明るいのだろうが、街の中心から外れた河原は灯りも少なく既に夜そのものだ。離れた場所を電車が行き交う鉄橋や車が連なる橋も見える。

だが、ゴルフ場と野球場と公園くらいしかない河原は人の流れもほとんどなく、川のせせらぎすら聞こえる始末だ。

「――友達を送って行くから少し遅くなる」

そんな所に女の子を放り置いて帰ったとなれば、それこそ親の逆鱗に触れかねない。

送る相手を女の子であると強調すると、母はあっさりと帰宅が遅れることを認めてくれた。

僥倖である。普段は言うこと為すこと認めてはくれないというのに。

「三時間も歩きまわったら憑かれたんじゃないか？」

「は、はい……」

「……。疲れるよね」

「え、あ、はい……」

ネタが滑った。説明し直すのも恥ずかしいのでそのまま流してもらおう。

両親への電話の間、彼女には待たせてしまった。俺のためにこれ以上の無駄な時間は使わせるのはよくない。

「遅くなってしまったから家まで送ろう」

「いいんですか？ 先輩、前に両親が厳しい人だって言っていたじゃないですか」

「随分と前の話だな。ダイワさんは記憶力がいいんだね」

「それは、先輩のことだから……その、覚えているんですよ
ふむ、またからかっているのか。」

悪女め。照れた顔をしてもダメなものはダメだ。

「先程、家には遅くなると伝えた」

「……。そ、そうなんですか。あ、そうだ。先輩、私の家の場所分かりますか？」

「……………。知らない」

意気込んで送るといったのにこのざまだ。

さて、どうしたらいいだろうか。素直に頭を下げたて教えてもらおうか。

と、思っているとダイワさんはおずおずとしながらも俺の服の裾を引っ張って存在をアピールしていた。

「それなら私と一緒に来てください。そうすれば、道も覚えられて今後に役立ちますね」

「それは暗にまた送れと言っているのかね？」

「そ、そういうつもりじゃないですよ」

「はははっ、冗談だ。親切に教えてくれてありがとう。俺も面子が立つというものだ」

「いえ、どういたしまして。私も送ってくれると先輩が言ってくれて嬉しいんですよ。あ、もちろん、変な意味はないですからね」

「ダイワさんは邪だな」

「難しい言葉を言ったら私が煙に巻かれると思ってません？」

ああ。服の裾を掴んでいたのはこうなることを予測していたからか。

助手として俺の性格が分かってきたらしい。

「ヒットアンドアウェイは基本中の基本だ」

「釣りあげたら餌を上げないといけませんよ」

「釣りはヒットしたらそこで糸を切るタイプだ」

「酷く迷惑です!？」

だが、まだまだ本当の自分までは教えたことはない。

それは向こうも同様だろう。

「さて、ダイワさん。もう六時半だ。おうちの人も心配する頃だろう」

「急に子供扱いする」

「助手の面倒を見るのも先輩の役割だ。遅くまで女の子が外を歩くものじゃない」

「急に女の子扱いする」

こうやって馬鹿なことをするのはUMA探し、そして生物部の活動中では唯一の清涼剤と言えよう。

「ダイワさん、ダイワさん、参りましょうか」

「私は一人ですよ、先輩」

今日の調査は何の進展もなかったが、ダイワさんの笑顔を見ていとまた明日も頑張れる、そんな気がする。

「それでは、先輩。私が案内しますから。……変な人が出てきたらダイワさんの恐怖を語ってあげよう」

「それ、私だけが損するじゃないですか」

ダイワさんが一歩前に出て俺の横に並んだ。

普段は一步後ろに控えているから自分一人で喋っている気になる時があるのだが、こういう風に横にいてくれると人と話している、その感覚をより味わうことが出来る。

「行きましょう」

と、言う彼女に合わせて俺も歩き出す。

「あれ？ お呼びではありませんの？」

しかし、急に背後からの女性の声に驚きを隠せずに立ち止まってしまった。

くすくすと笑う声が聞こえ、振り返るとお見合いでも行ったのかと思うような和服の美麗な女性が佇んでいた。

「お姉さんは一体どのような方なのでしょう？」

「はい。恐れ多くも――」

「お、お姉ちゃん！？ 何しているの！？」

美麗なお姉さんの声はダイワさんにかき消された。

姉ということは図らずもダイワさんが二人になったということだ。

ダイワさんの家は学校から徒歩で十五分ほど。

閑静な住宅街の中にある中堅上位のそこそこ裕福な層が住む地域に住んでいる。

これがダイワさんから聞いて得た情報である。

「大和撫子はお金持ちの娘に多い気がするのだが。休日はこちらの地域も調べてみようと思う」

「……先輩、短絡的です」

「ふーん、大和撫子を探しているの。……知り合いにはいそうもないわね」

ちようど家に帰る所だというダイワさんのお姉さんも一緒になって並んで帰っている。

図らずも真ん中を歩く俺は両手に華という所か。

身内同士だとしても俺を挟んでいても二人だけで会話が飛び交うのだが、二人とも気を遣っているようで俺が仲間から外れることはなかった。

「あ、そうだ。自己紹介していないわね。私は、撫子の姉の桜子よ。妹がいつもお世話になっております」

「それで、お姉ちゃん。こちらは久宝寺 優真先輩。私と一緒にフ

イルドワークをする先輩だよ」

「久宝寺 優真です。ダイワさんにはとても優秀で私の足りない所をいつもフォローしてもらっています」

「せ、先輩が真面目に挨拶してる!？」

初対面の人間に暴虐無人な俺だつてとらない。

ダイワさんの反応を予想しての対応だが、予想通りに反応してくれると嬉しい。

だが、俺が喜ぶ半面、ダイワさんのお姉さんはあまりいい顔をしていない。

「こら、撫子。年上の人は敬いなさいといつも言っているでしょう」随分と躰けに厳しい家庭のようだ。

「お姉さん。ダイワさんとはいつもこのような感じですから。怒らないであげてください」

慌ててダイワさんとお姉さんの視線の間に割って入る。

すると、その矛先がこちらに向いてきた。顔は笑ってはいるものの、目だけは笑っていないので少し怖い。

「優真君。君もダイワさんだとどっちを呼んでいるのか分からないわ。私のことは桜子、妹は撫子と呼んでね」

「ダイワ姉さん」

「却下!」

「厳しい御方だ」

「うふふ、お姉さん、素直な子の方が可愛くて好きよ」

……このお姉さん、分厚い猫を被っている気がする。

久しぶりに勝てそうもない人が現れた。

被る猫も探そうか。いや、もうここにいるからUMAでさえないか。俺に出来ることは思考に逃げるしかなかった。

「桜子お姉さん」

「うんうん。やっぱり年下の男の子は素直が一番」

結局、押し切られる形で俺がほぼ全面的に折れることとなった。
さらに余計な呼称までつける羽目になったのだから年上は恐ろしいものだ。

この人は大和撫子ではないだろう。

「せ、先輩。私のことも、その、呼んでもらえますか？」

「……ダ、撫子さん」

「うんうん、まだダイワさんと言いかけているけどとてもいい感じよ」

俺の頭を撫でながら桜子お姉さんは満足そうに頷いた。

悲しいくらいに為すがままにされているが、弁明という名の理由がある。一つは、もう会うことはないということ。そして、もう一つは――。

ダイワ姉さん。

「ダメね」

「……思考を読むのはやめていただきたい」

言葉にしなくても彼女は分かっってしまうのだ。

生物なのだろうか、桜子お姉さんは。

学会に発表したら世紀の発見になりそうだ。

色々と会話をしていると時間が経つのは早いものだ。

撫子さんから言われてようやく俺は彼女達の家の前にいることに気がついた。

ダイワさんの家が――。

「……ダイワハウ――」

「それ以上は言っではいけません！」

「優真君はいけない子ね」

当人達の家の前で叱責される男の構図は、御近所の噂的になりそうだ。

……用事も済んだし、帰ろうか。

「それでは、ダイワさん。また部活で」

「あ、また、元に戻ってるじゃないですか。ダメですよ、名前で呼んでくれないと」

「何とか頑張ってみよう、と思う」

「いつになく弱気ですね」

「ああ、人間関係にはどうにも疎くてね」

「あらあら、人間も生物よ。人を知らずして他の生物を知ろうなんておこがましいわよ」

「ダイワさんとお姉さんみたいな人なら楽なんですけどね」

「はははと笑って俺は、失礼します、とダイワ家を後にしようとした。」

「優真先輩。……も、もし、よかったら、今度の休みに遊びに行きませんか？」

だが、聞いたこともない誘いの言葉を言うもので俺は足を止めた。

「あら、それならお姉さんもついて行こうかしら」

そして、それに便乗する桜子お姉さん。

休日は大和撫子探しをしたいのだが……。

校内では変人と呼ばれていても、残念ながら俺は内面はごく一般的なのだ。

それに大和撫子のお姉さんならば、探している人かもしれない。そんな淡い期待もあったのだった。

3話：彼女は二人

大和撫子探しも終わりが見えない。

UMAなのだから覚悟はあったが、いると思われるだけに気持ちだけがどうにもはやるばかりだ。

生物教室に入った俺は既に来ていた部長に、今日も大和撫子っぽい何かを引き合わせる。

「部長、連れてきました。UMAの大和撫子です」

「あら『優真君の』撫子ね。でも、私は桜子なんだけどな」

少し痩せた気がする部長は桜子お姉さんを見るや否やがっかりとした様子で頭を垂れた。

うん、分かつてはいる。この人も大和撫子ではないのだ。

「……久宝寺君」

「はい、部長」

「彼女は猫を何匹被った大和撫子なのだね？」

特別大きく重たい猫をきつと被っているのだと思う。

本人もいるからそういうことは言わないが。

「あら、何かな？」

「いえいえ、奥さん。何も言っておりませんとも」

余計なことを言うから部長が目をつけられた。

「本人を前にそれは失礼ではない？ ねえ、優真君。私って人妻っぽい？」

「子育ての終わった主婦の貫録を感じます」

でも、聞かれたら答えざるを得ない。

しかし、こればかりは一応若い女性である桜子お姉さんの心に深くダメージを与えたようだ。

「いやあああつ」

何の反撃もないまま彼女はふらふらと生物教室を後にした。

そして、入れ替わりに妹の撫子さんがやって来て小首を傾げている。

「な、何かあったのでしょうか？」

「猫被りを見つけたんだ」

「どんな猫でした？ それはいつ研究できますか？」

「しなかったら桜子お姉さんに聞いた方がいい」

「……桜子お姉さんって……先輩、随分染み付いてしまったんですね」

呆れた理由は姉か俺かどちらだろう？

でえと、なるものがあるそうな。

男女が二人で出掛けることを言う。

「……本当について来たんですか」

それならば、何故この姉妹は揃いも揃って来ているのだろうか。

「当然じゃない。面白い——じゃなくて妹が心配なのよ」

「すみません、先輩。お姉ちゃんがどうしてもついて行きたいと聞かなくて……」

一体どこに行こうというのか、二人と和服である。

対する俺の格好は白衣にスニーカーという舐め切ったもので、仮装パーティーにでも出席するようなパチモンの科学者スタイルだ。

ああ、周りからの好奇の目が痛い。が、少しぞくともする。

「いいじゃない。私は優真君に興味があるんだけどなあ」

この人を一瞬でも大和撫子なんじゃないか。そう思ったことが悔やまれる。

そうでないなら、この桜子お姉さんが残念すぎる。年上ぶってからかいたい年頃なんだろうということで俺はそれ以上の考えをやめることにした。

「ところで、撫子さん。今日はどこに行くのかね？ 聞いても教えてくれなかったじゃないか」

うん、こちらの方が大切だろう。大方、買い物に違いない。撫子さんはうちの紅一点だから結構おしゃれに気を遣っているようなのだ。

「買い物ですよ、先輩。洋服を買おうと思ったんですけど……今日はシャンプーとか日用品です」

「あら、そうだったの？ てつきり下着——」

「お姉ちゃんは黙ってて。……こんな姉ですけど、頭以外はそれなりに優秀なんですよ」

実の姉を目の前にしてこれだけのことが言えるのだから姉妹仲は良好に違いない。

……我が家とは大違いだ。

「……先輩、顔色が悪いように見えますけど。あの、無理をしているようにしたら——」

「っ！？ そんなことはない、最近研究の成果がなくて焦っているんだ」

あー、危ない危ない。嫉妬、羨望、そういった感情がつい表に出てしまった。

まだまだ割り切るには時間がかかるようだ。夢も現実も。

「大和撫子、ですよね……。私が名前の通りだったらよかったんですけど……」

「いや、気持ちだけで十分だ。俺の手伝いなんて面倒だろうによく頑張ってくれているし、興味を持ってくれたのも撫子さんが初めてだ」

「いえ、私だって先輩には研究でお世話になってますし……、その、何かお手伝いできたらいいなと思っていたので気にしないでください」

こないいい子に心配をさせるなんて、俺は一体何をしているのだ。わざわざ成果が出ない俺を誘って気分転換をさせようとしているくれているのに。

うむ、今日は研究のことは忘れて一日楽しもう。

「あ、先輩、顔が明るくなりました。ふふっ、私もほっとしました」
「成果の出ない研究ばかりしていると気分の切り替えは得意になるものだ」

「是非、今度、私にも教えてくださいね」

「ああ、いいとも」

どうしたらこのように素直な子になるのだろうか。

純粋な彼女の顔が今は眩しく感じる。

たまにはこのような女の子と外を大手を振って歩いても罰は当たらないだろう。

「お姉ちゃんも教えてもらうといいよ？」

「えー、だるい……」

だが、撫子さんと顔を合わせて笑っていた俺がもう一人いるということに気がついたのは、わざとらしい咳払いのせいだった。

「……お姉さんにも会話振ってほしいぞ？」

「あ、はは」

「その乾いた笑いが心に突き刺さる。よし、まずはお姉さんと撫子のことをもつと知ってもらおう」

突然、桜子お姉さんは俺の左腕をとると、体をべったりとくっつけてきた。

何と言つか和服というものはもっさりとしている気がする。

「せ、先輩。て、手を繋ぎましょう」

「何故だ」

「姉がよくて私がいけないという道理なんてありませんから」

心の底からスカッとするくらいに清々しいまでの笑顔を撫子さんは見せていた。

これには桜子お姉さんは苦笑するしかなかったようだ。

「これが両手に華って言うのね」

「先輩は果報者ですね」

言っている言葉は同じでも、逃避と純粋にそう言っているのではあまりに違いがありすぎる。

俺はただ苦笑いをしてその場をやり過ごすことにした。

この日、一日中連れ回されて二人のことをほんの少しだけ知った。大和撫子ではないことも、姉妹のどちらかが姓を残さなくてはいけないも。

「何を思い出しているんだろうな」

もっと楽しいこともあっただろうに。

まどろみの中、思考はいつだって錆びついた車輪のようになかなか前に進もうとはしなかった。

最後に思い出したのは、笑って別れた駅前の二人のことだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1595s/>

絶滅危惧種『大和撫子』

2011年4月11日00時10分発行